

望郷の歌人岡野直七郎

# 索引別全歌集

一噌静子編

望郷の歌人 岡野直七郎  
索引別全歌集

---

平成元年12月11日 初版第一刷発行

編 者 一 噌 静 子  
発 行 者 川 上 徹  
発 行 所 (株) 同時代社  
東京都千代田区西神田2-7-6  
電話 03-261-3149 F A X 03-261-3237  
印刷製本 K M S

---

望郷の歌人 岡野直七郎

# 索引別全歌集



## 序

岡野直七郎先生は実子に恵まれませんでしたが、養子を迎えることもしませんでしたから、跡を継ぐ人は居りませんでした。老年期に入ってから、老後、さらには自分の亡きあとのことが大層気になって、老後の面倒を見て貰う人を指名して頼んだりしておられました。結局郷里で姪の岡野正枝さんの手厚い介護を受け亡くなられたのですが、亡き後の事はおよばずながら弟子として私共が出来るだけの事をさせて頂くべきだと思っております。

まず「全歌集」が本年四月短歌新聞社から出版されました。この採録の際に、索引別にしてそれぞれの歌集名を附加した原稿も作りました。先生の九十年の生涯を回想し、岡野直七郎像を形に残したいと思った時、索引別という形をとって「音」によって分けられた、歌集というよりはむしろ「辞書」の様な形体の「歌集」があってもよいかと考え発行に踏みまりました。

第一歌集「谷川」は、短歌に魅せられ作歌をはじめた十代からのいわば幼い歌も含めた歌集で、<sup>〃</sup>あとがき<sup>〃</sup>にも「今直せばいくらでも直せるが、作歌当時の気分を回想して、表現の拙いものも殆ど原作のまま採録した」と書いてあります。大学を卒業し軍隊生活を経て勤めた信託会社を辞職する時までの歌を収めてあります。昭和三年発行、定価は壱円八十銭、発行所は東京市外渋谷町北谷四十六番地、蒼穹社となっています。

「都塵に立つ」は昭和十七年一月発行で、この頃すでに紙が入手困難で、蒼穹同人の矢吹弘史氏が歌集を出版した際の残りの紙を使っていたいきさつがあります。職を捨て「あおぞら倶楽部」と

いう飲食店の経営にも失敗し、馬場鏐一先生の伝手によって勸業証券に勤め、そして文筆業に専念すべく、この会社もやめるまでの八年間の作品をまとめてあります。実務関係の事を歌にした作品が多く、調子も固く所謂しらべを大切にしたいという感情から程遠いものが多く、かえって心の内に鬱屈したものが、「新浪漫主義」という形で噴き上る結果となったと思われます。発行所は目黒区清水町四七五、定価は三円となっています。

「太陽の愛」は昭和十年から十二年までの歌を採録し、新浪漫主義を高く掲げて、実業界からも遠ざかり、文学ひとすじに生きた頃の歌です。自然にある種の気負いも見られますが、岡野直七郎調として残る歌の中には沢山あります。昭和十五年八月発行、甲島書林発行で定価は壹円七拾銭です。

「林の道」は戦後すぐの昭和二十二年の発行で、紙も悪く、しかし内容は美しい作品が多く載っております。昭和十二年七月から十六年十一月までの三百九十八首が収められ、新浪漫主義も当初の気負いがとれて、あとがきにも作風が「太陽の愛」と大分変わっていると認めています。発行所は人文書院、定価は六十円です。

戦中戦後の歌をまとめたのが「夜明け空」で、前後二編に分れています。敗戦を期に全く異った生活に入り、精神的にも百八十度方向転換をしなければならなかった時代を歌にしています。この時期に大切な養父母を喪い、最愛の人を妻とするところで終わります。昭和三十一年一月発行で定価は五百円です。

次に「地の光」を昭和三十八年十一月に、又「花を尋ねて」を昭和三十九年九月に姉妹編とし

て出版しました。「夜明け空」から約八年の空白があったのは、進駐軍をやめ、経済企画庁を経て東京都市銀行の創立に携った時期であったからです。昭和四十四年には「夕陽の丘」を第八冊目の歌集として出版しました。昭和四十六年に「朝の鐘」を発行しますが、この発行間近の頃から中野のコーポに独居することになります。昭和五十七年に六十年にわたる東京生活に終止符をうって、郷里岡山に帰り、郷里で「朝の鐘」以後の歌を整理し、帰郷後の歌も加えて故山の名を冠した「龍臥山」を出版しました。

この他に選集として昭和二十五年に「鶴」を、また喜寿記念に昭和四十二年に「精選四百首」を出版しました。

これ等の歌集の歌を、初句の頭音でそれぞれに分類しましたので、また異った鑑賞も出来るかと思ひます。

読み方で全く位置が変わりますので、苦心しましたが、読みちがひがありましたらおゆるし下さい。

平成元年八月二十四日

一噌 静子

### 索引別歌集の表記について

- ①上の句の初めの音によって編集しました。
- ②歌の下に記載された本の名と、その記載頁を算用数字で表わしました。
- ③複数の本に載っている時は原本をはじめに書き、記載頁も原本のみに限りました。
- ④「谷川」は筆写したものしか手許になく、記載頁を記すことができませんでした。

# 全歌集索引

|     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| あ…… | 9   | た…… | 195 | ち…… | 311 |
| い…… | 37  | ち…… | 211 | み…… | 321 |
| う…… | 59  | つ…… | 217 | ぢ…… | 333 |
| え…… | 70  | て…… | 225 | ぢ…… | 337 |
| お…… | 73  | と…… | 230 | お…… | 341 |
| か…… | 89  | な…… | 244 | か…… | 347 |
| き…… | 107 | に…… | 254 | か…… | 359 |
| く…… | 117 | ぬ…… | 259 | か…… | 366 |
| け…… | 127 | ね…… | 260 | わ…… | 377 |
| こ…… | 131 | の…… | 262 | わ…… | 394 |
| こ…… | 152 | は…… | 264 | を…… | 394 |
| し…… | 162 | ひ…… | 278 | ら…… | 399 |
| ち…… | 178 | ふ…… | 295 | ら…… | 400 |
| ち…… | 184 | く…… | 305 | ら…… | 401 |
| そ…… | 190 | は…… | 307 |     |     |

六高時代の岡野直七郎（写真右）。  
後列右から一人おいて岡野とう、二人  
おいて岡野増次郎、直七郎。前列右か  
らとうの妹寿枝子、同じくとうの妹、  
とうの母とめ、美智子（写真下）。



岡野直七郎著書

書名

発行年月日

発行所

歌集「谷川」

昭和三年八月

蒼穹社

歌集「太陽の愛」

昭和十五年八月

甲鳥書林

歌集「都塵に立つ」

昭和十七年一月

蒼穹社

歌集「林の道」

昭和二十二年八月

人文書院

歌集「鶴」

昭和二十五年七月

明窓書房

歌集「夜明け空」

昭和三十一年一月

白玉書房

歌集「地の光」

昭和三十八年一月

新星書房

歌集「花を尋ねて」

昭和三十九年九月

新星書房

歌集「夕陽の丘」

昭和四十四年五月

新星書房

歌集「朝の鐘」

昭和四十六年五月

新星書房

選集「精選四百首」

昭和四十二年二月

短歌新聞社

歌論集「短歌新論」

昭和十三年十月

人文書院

歌評集「歌壇展望」

昭和十四年九月

人文書院

歌論集「短歌論叢」

昭和四十二年三月

蒼穹社

鑑賞「戦時中の秀歌」

昭和四十七年十一月

新星書房

歌集「龍臥山」

昭和五十九年二月

近代文芸社

歌集「岡野直七郎全歌集」

平成元年四月

短歌新聞社

## あ

(四百八十三首)

朝つ日のたださす路に霜柱いまだはとけず光りたるかな 谷川

朝戸出のこころはかろく霜柱さくさく踏みていそぎけらずや 谷川

あをあをと都おほへる空のもとあゆみつづけてうれしくもあるか 谷川

朝つ日のかがよふ水田<sup>みた</sup>にかいかいとあしたさやかに蛙は鳴けり 谷川

朝つ日のひかりのなかにわれ立てばわが影ながし水田<sup>みた</sup>のおもてに 谷川

あちこちのあけはなちたる部屋部屋にわかき女らくつろげる見ゆ 谷川

朝つ日にかがやく波のてりかへしわがゐる部屋の壁にうつるも 谷川

浅宵を宿のをんなのかんだかに電話をかくる声あわただし 谷川

ありがたき母のみ酒に酔ひしれて帰るみちみち涙こぼれぬ 谷川

雨そそぐ広き草野をよこぎると濡れてあゆめばうらさみしけれ 谷川

雨空に雲雀は鳴けりたえまなきその鳴き声にさみしさを堪ゆ 谷川

あらはなる山の肌<sup>はだ</sup>に朝日さし富士の大峰けざやかに見ゆ 谷川

あざやかに山に日は照る山巖に消のこる雪をかがやかしつ　谷川・鶴

愛鷹わじだかに雲かくれりと見るうちに野面のづらをこめて霧おそひきぬ　谷川

秋草の花はおのづとさみしきに霧はしらじら流れてやまず　谷川

あの友もこの友もみなよき人なり寢息かそかに今はねてゐる　谷川

あまりにもしたしげなれば名に高き呉佩字としも思はれなくに　谷川

赤禿の山のなぞへにぼつちりと黒き懐なの草はみてゐる　谷川

あやうくもいのちたすかり地震なあとの家の掃除を今朝はしてをり　谷川・鶴

ありし日はゆききなれにし道なるを行きまよひたりこの焼野原　谷川・鶴

歩きぶりものの言ひぶりいまもなほ眼にはありつつ友すでになし　谷川

あらはにも山とつまれし白骨にせうせうとして秋の雨ふる　谷川

あをあをと高き木立にかこまれて薨い古りたる浅草の寺　谷川

秋の雲白くうかべりうつしよにはかなく生くる人の真上に　谷川

あるものは死にてゆきけりさもあらばあれのこりし人は生きねばならず　谷川

朝風は寒くこそ吹け生きのこり生くるつとめでいでゆく吾を　谷川

朝戸出のころあかるし見る見るに路にふり積む雪を踏みつつ　谷川

荒川の磧の草もすがれけり白く光るは蒲の細茎　谷川

荒川の水ひとすちに流れ去り川下遠く冬霞せり　谷川

青あらしわたらふなべに隣家となりやの遅咲おそざき桜ざくらみだれ散る見ゆ 谷川

朝つ日の澄み照る庭にあぐらゐて青き松葉をはめる父かも 谷川

青松葉食みつつはゐる父のすがたしみじみ見ればおきなさびたる 谷川

秋草を食みたらひつる牛ならむかうべもたげて動くともなし 谷川

秋深き空の青さようらがれの伊豆の草山まろやかにして 谷川・鶴

あかあかと岬の鼻に夕日さし巖いわの罅ひびさへつばらかに見ゆ 谷川・鶴・精選

あきらけき秋の月夜に床並めて語りしことも今はむかしか 谷川

蒼穹に飛行機とべり上つ羽はあかるく透きて下羽は黒し 谷川

足もとに烏賊の甲羅を見いでたり浜遠く来てわれは疲れぬ 谷川・鶴

粟粒のかたまりなせる棕櫚の花わが撫でてをり何かうれしく 谷川・鶴

朝風のかすかに吹くや茄子の葉はやをらに揺れてまたひそまりぬ 谷川

あちむきに咲きたる茄子の花見ればこちらに向けと言はまくほしも 谷川・鶴

天つ空夕焼けにけり庭石の白き石さへあからみて見ゆ 谷川

新らしき軍人服をつけたればしやちこぼりたるわれとなりにし 谷川

青すすき一たば持ちて帰るときをさなごころに立ちかへりたり 谷川

秋晴れのひと日は暮れぬ庭の樹の梢にわづか日かげのこりて 谷川

足をもて追へば小蛙かなしもよすがれし草につかまりにけり 谷川

足ばやに暗夜の道をもどりつつもろ頬寒し風にむかひて 谷川

あたらしき筆おろしたりかにかくに心しづめて文字書かむとす 谷川

相對ひ手と手拍うち合ふ女童めわちのせつせ唄二つそろへり 谷川

あてもなくあゆみし道は松山の低き峠にさしかかりたり 谷川

あやふしと聞きは聞きつつわがかけし一縷ののぞみ切れてしまひぬ 谷川

義兄にあて手紙書きつつ眼のうちにたまる涙をわがぬぐひたり 谷川

朝照りの歩道の上に或る店ゆかがやく水をぶち撒きにけり 谷川

あはれなる子をおもふなり願はくは心すなほに伸びしめたまへ 谷川・鶴

浅宵のあかりのもとに白き本ひとつを置きぬこのあたらしさ 谷川

青き空青き草木に眼をやりてひとりたのしむわれとなりにし 谷川

秋づきし原の空氣にさやかなり野球の珠たまをかつとばす音 谷川・鶴

あかつきの夢にあひ見し時すらも歌の話を君はしにけり 谷川

青山の兵隊が吹く喇叭ねの音ほがらほがらに年明けにけり 谷川

あかつきのかそけき光戸の間よりさし入る部屋にわれは覺めをり 谷川

朝ほりに鴨らあそべり餌をとるとからださかさに尻立つる見ゆ 谷川

朝ゆふに弁護士矢代亀広の白き立札見てとほるなり（三宅坂） 谷川

朝なぎの濠をへだてて向岸にひとかたまりのたんぽぽの花 谷川・鶴

朝日子をそのふところにかくまへる薄雲うすぐもの縁ふちの白くかがよふ 都塵に立つ 8・綵雲

空庭あきにはに焚火燃もしつつ詮もなくかへりみおもふわがこしかたを 都塵に立つ 11・綵雲・鶴

あまりにも物ごと知らず過ぎ来にしわれと思ふに心のつまる 都塵に立つ 12・綵雲

明けそむる年のあしたに臥床ふしどにてわが身のすゑを思ひめぐらす 都塵に立つ 14

朝嵐はげしきなかに放ちたる蝶いづはの彩羽いろははあふられにけり 都塵に立つ 21・松原・鶴

青き絵をしたたかに見て疲れたる眼にすがすがし噴ふきあげの水 都塵に立つ 25・松原

上あがり框がまちに靴をぬぎつつこの家に育ちにし日をかへりみおもふ 都塵に立つ 31

天の川白きがもとの縁台えんたいに父とかたらふ蚊をはたきつつ 都塵に立つ 31・鶴

關伽の水手にさげもちてゆく道を跳んでよぎりぬ小蛙ひとつ 都塵に立つ 32

姉を憶ふ心のうごきとどまらずよろめきて吾は墓につかまる 都塵に立つ 33

暑からむとひとりごちつつ姉の墓にもて来し水をかけ流したり 都塵に立つ 34

あるかなき呼吸いきのしたよりわれの名をかすかに呼びてあきらめしとよ 都塵に立つ 39

秋立つとけふの暦こよみにありしかば日のくれがたに雨落ちにけり 都塵に立つ 56・松原・鶴

青谷に架けわたしたる橋白し其処より水にわが下りなむか 都塵に立つ 59

秋ふかき木群こむらが上の空を截きり新議事堂は白くおちつく 都塵に立つ 61・群鳥・鶴

秋の日に白き近代建築の片面かたもは翳かげる角かどはやかに 都塵に立つ 61

新しき甍むねのひかり見るにすら世になきひとを思ひたまはむ 都塵に立つ 68

青空に昼飛ぶ雲をあふぐなりかすかなりけりわがやすらひは 都塵に立つ 71・群鳥・鶴・精選

青耀あきとのひかりの空に目をあげて街ゆくわれか幾年ぶりに 都塵に立つ 73・群鳥

あをあをし空にみちたる日の光にいつまでわれの道をあゆまむ 都塵に立つ 73・群鳥

あはれ世にいかにあせれど働けど一人のうごき言ふ甲斐もなし 都塵に立つ 76・群鳥

穴通ふ白き銭にも頭を下げし去年を思へばやすけし今は 都塵に立つ 77・群鳥

ありし日の田安中将宗武がしつらへし庭は今もみどりに 都塵に立つ 80

あかつきは野菜車の市にゆくひびきに覚めぬいつく続くや 都塵に立つ 84

雨風の外に荒るるを都屋のうちはわらひあかるく空気ががれり 都塵に立つ 85

あをぞらの深きをあふぐいとまなきわがあげくれはけぶりのごとし 都塵に立つ 86・群鳥

あらあらしき言はいはねど常若のころしづかに燃えてあるべし 都塵に立つ 91

あわただしかりし春すぎおのづから心澄みくる勿体なさを 都塵に立つ 93・群鳥

朝空の碧きにむかひ掌をあはすこのしづこころ常もたしめよ 都塵に立つ 93・群鳥・鶴

紅き霧といふをわが見ぬネオン照る浅夜の街に立ちまよふもの 都塵に立つ 109・群鳥・鶴

青き卓に列序ただしき並びたる名刺の数が示唆するもの 都塵に立つ 113

蒼海を見わたす宿の欄の下にたちまち来寄る魚売いくたり 都塵に立つ 136

青く澄む空の光をみだしつはばたきおもく鶴一羽ゆく 都塵に立つ 138

青に黄に車窓の眺めうつる故つねよりも軽く上役と話す 都塵に立つ 141

青き水にあまた舟浮けあそべども間ぬけて見ゆれこの遊人らは 都塵に立つ 148

愛情と金銭との交錯ここにしてこのさわがしき人の群に見る 都塵に立つ 152

蒼白ききみが長面見し日より一年あまり教うけにき 都塵に立つ 153

新しき機械が放つ迫力に声あげむばかりわれはたじろぐ 都塵に立つ 155

秋日さす公孫樹並木の校庭をあゆみ来ませしみすがたおもほゆ 都塵に立つ 168・鶴

天そる高山暮れて 嶺より縁のかがよふ雲湧きやまず 都塵に立つ 171・鶴

隧道の暗きをぬけてたちまちに富士の山見ゆ湖のうへに 都塵に立つ 171

朝静の湖を平たみしろじろと靄たちのぼるあたたかげにも 都塵に立つ 172

あそぶかと見ゆる白雲いつしらに伴を呼ぶめり富士の中処に 都塵に立つ 172

あれこれと金にかかはる仕事せし今日の昼間も過ぎてはるけし 都塵に立つ 176

浅草の観音堂の縁下に寝るらむ人はつめたかるらむ 都塵に立つ 177

あをあをと水湛へたる宮濠の際にをれがむしづごころもちて 都塵に立つ 177

荒川の草枯土手を川上にむかひて行けば風さむきかな 都塵に立つ 183・鶴

閼伽水をこころひそかに注ぎたり小さき墓石の濡れわたるまで 都塵に立つ 207

あづかりて持ちかへりたる給料は同僚のものゆゑおろそかにせじ 都塵に立つ 220

青よどむ淵にますぐに日はさして底つ小石のつばらかに見ゆ 都塵に立つ 222

青き樹の峰まで生ふるとがりやま静かに雲を処らしめにけり 都塵に立つ 223